

●「SHINWA WALK～伝説そぞろ歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、郷土の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

## SHINWA WALK 17

### 身代わり地蔵伝説

伝説  
そぞろ歩き

人の身は  
薄雲のごとく  
はかなし故  
旅人を守る  
身代わり地蔵



#### 身代わりで盗賊に斬られ

#### 盗賊を追い払った地蔵

豊明の二村山に伝わるのが、身代わり地蔵伝説です。昔、二村山に盗賊が住み着いていて、往来の人々をしきりに苦しめていました。ある夜、月が落ちた山陰の道で、盗賊は一人の旅人に狙いをつけ、襲います。その旅人は無言で金品を差し出し、また無言で盗賊をみつめました。

盗賊はその視線に耐えきれず、反射的に旅人を袈裟がけに斬り放ちます。旅人は音もなく倒れました。盗賊が近寄って旅人を引き起こそうとすると、その瞬間声を上げます。旅人だと思っていたのは、実はこの山頂に昔から住んでいた地蔵尊だったのです。盗賊は怖くなってその場を去り、二度と戻ってきませんでした。人々の身代わりになって盗賊に斬られ、盗賊を追い払ったことから、その地蔵尊は「身代わり地蔵」として今に伝えられています。

今でも、二村山の山頂の手前に地蔵堂があり、3体の石仏が納められています。「二村山峠地蔵尊」と呼ばれていて、そのうち2体は古く、それぞれ大同二(807年)、

延宝二(1674年)の刻銘があり、大同二の方には袈裟がけ斬りの跡が残っています。

山頂にも上下半身が分かれた地蔵が野ざらしで鎮座しています。「二村山切られ地蔵尊(身代わり地蔵)」と呼ばれていて、下半身の背面に「古来仏依会大破建立之延宝七己未年」の刻銘があり、伝説を元に延宝7年(1679年)に建立されたものといわれています。

また、山の下の濁池は、盗賊が人を斬った血のついた刀を洗ったところで、池が血の色で濁っていることから、そう呼ばれるようになったといわれています。



#### ヘラクレスの心も動かした 愛に満ちた深い夫婦の絆

ギリシャ神話で「身代わりの死」といえば、テッサリアの王・アドメトスとアルケステイス夫婦の話が有名です。アドメトス王のもとにはゼウスから追放を受けたアポロンが仕えて家畜の世話をしていました。誰に対しても親切なアドメトス王は、アポロンが神であるとは知りませんでしたが、すべての人々にそうしたように親切に接し、アポロンはいつかその恩返しをしようと誓います。そして、アポロンの力を借りてアルケステイスという美しい女性と結婚することができました。

しかしそんな幸せもつかの間、アドメトスが若くして突然病気になるまで死に見舞われてしまいます。そこで、またしてもアポロンが活躍。運命の女神たちを説得して、王の身代わりに喜んで死のうという者が現れたら、王の命は助ける約束を取りつけます。とはいえ、身代わりになる者はなかなか現れません。その時、なんと妻のアルケステイスが身代わり役を買って出ます。そして、アドメトスの病状が回復するのと同時に、アルケステイスは死の床に伏していきました。

アルケステイスを危機的状況から救ったのがヘラクレス。絆が深い夫婦愛に意気に感じたヘラクレスが彼女のもとへ死神がやってきた時、死神を捕まえて、冥界に連れていくのを阻止したのです。アルケステイスの病気は回復し、アドメトスのもとへ戻り、二人は幸せに暮らしました、め

でたし、めでたしという典型的なハッピーエンドです。ギリシャ神話の中でもっとも心温まるエピソードといえます。

夫婦の絆を、愛と自己犠牲の力で強めたアドメトスとアルケステイス夫妻。英雄ヘラクレスの心を動かすほどの夫婦愛に満ちた二人は、理想的な幸せな夫婦のカタチといえます。



▲二村山の山頂に今も残っている身代わり地蔵。

※次回は、笠寺観音に伝わる玉照姫伝説について特集します。お楽しみに。

■ 写真/Kiyoshi K ■ イラスト/Rei ■ 取材文/Icarus